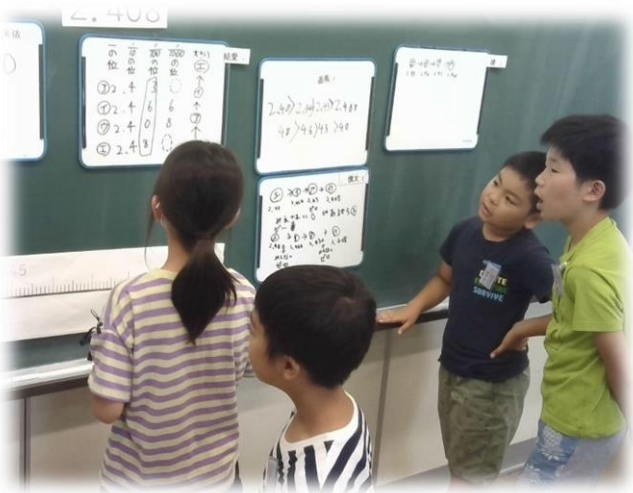
令和5年度研究集録

誰一人取り残さない　子供が育つ授業づくり



河北町立谷地西部小学校

「子供が育つ授業づくり」をめざして

校長　白田　敏幸

今年度より、学校研究の考え方や方法を大きく変えた。（詳細は、研究概要参照）これまでの授業研究会が、授業づくりと準備に費やす時間との関係において、本当の意味で「子供のためになっていたのか。」「教員の資質・能力の向上に結び付いていたのか。」ということを問い直した結果である。

まずは、授業そのものについてである。これまでは、普段しないような、またはできないような授業をつくってきたということはないだろうか。（研究会だから普段できないような授業をしようという考え方があるのも承知している。）事前研を数回繰り返し、様々な意見をもらって本時をつくり上げていく。最後には、誰の授業なのか分からなくなる場合もある。「授業研で『見せる（見てもらえる）』のは、どこがいいか。」「どうすれば授業は『流れる』のか。」ここに違和感をもった。授業をつくる主語が、「子供」ではなく、「教師」なっているである。子供の思考に合わせた授業づくりが求められているのに、である。そこで、学校研究の日常化をめざし、授業研究会では、それら日常的に実践していることについて「子供の姿」を通して検証していくこととした。

２つ目は、事後研のもち方である。いわゆる事後研で子供の姿を通して学ぶことは当然であるが、学ぶのは、授業者以上に「参観者でありたい」ということである。授業者は、授業づくりを進めていく上で十分学んでいる。参観者は、決して評価者ではなく（授業批判や自分の過去の実践を話すのは禁止）、本時の授業を参観し、「何を学んだのか」、「明日からの授業で『自分は』何をしていくのか」、について、一人一人語る場を設けた。事後研を授業者のみの学びの場ではなく、参観者の学びの場として捉えるようにした。

３つ目は、指導案である。「指導案を書く力が必要」という声も聞かれる。しかし、本校では、指導案作成より、教材研究に時間をかけるようにしたいと考えた。本時については、授業を「流す」のではなく、子供の学びや思考を授業の中でどう支えていくか（支援していくか）についてより明確にした。子供の学びを見取り、その姿と目標を照らし合わせ、どんな支援が必要なのかを決定し、実際に支援をする。（授業の中の OODA ループ）この思考と動作を、指導者は瞬時に行っていくのが授業である。自分が考えた授業の流れに無理やり子供を合わせていくのは、「子供が主語の授業づくり」とかけ離れていくと考えている。

そして４つ目が、授業の前にまずは学級経営を大切にすることである。当たり前の話ではあるが、再度全職員で確認をした。何でも話し合うことができ、お互いを否定することなく話が聞ける温かい学級の雰囲気がなければ、「主体的・対話的な学び」の実現は難しい。子供が安心して学べる環境づくりを大事にしたいと考えた。また、小規模だから実現できた教科担任制（１年を通して、全担任が全ての学級で授業をする）により、全職員で全児童を支援する体制づくりが整い、自分の学級だけでなく、他の学年の学級経営にも関わることができた。

今年１年、学校研究を通して、全ての教職員が「子供が自分の学びをつくる」ことについて考えることができた。研究を進めていく中で、いくつか課題もはっきりしてきた。今年度の実践を大切にしながら、次年度も「子供が育つ授業の在り方」について探っていきたい。

1　校内研究

（1）　研究主題

誰一人取り残さない　子供が育つ授業づくり

（2）　主題設定の理由

①　学校教育目標から

本校は、「誰一人取り残さない　子供が育つ学校づくり」を教育目標に掲げている。「誰一人取り残さない」とは、全ての子どもの学びを保障することである。子供一人一人の学びを把握した上で必要な支援を判断すること、子どもの思考の流れを大切にし、子供と共に授業を作ること、そして、ICT 機器の活用により個別最適な学びを実現すること等、子供が理解できないのは、指導者の関わりに課題があると捉えることである。また、「子供が育つ」とは、「自分で考え、決めて行動できる」ことをねらいとしている。めざす子供像である「主体的に学ぶ子供」、「他者を尊重し対話できる子供」、「自分の身体を知る子供」の育成を目指し、複式の学習形態から「探究的学習」に迫っていく。探究には協働的な学びが重要であり、協働に必要な自分の思いを明確に相手に伝えることができる力を育てるために、資質･能力系統表を作成し活用していく。

②　昨年度の研究から

本校は、昨年度から完全複式学級となった。一昨年度から 2 年間は、「すすんで学び、共に伸びようとする子供の育成～複式スタイルの授業を通して～」という主題で研究を進めてきた。授業改善に取り組む中、複式学級での間接指導の場面で、主体的・対話的に学ぶ姿を多く見ることができた。間接指導時に、子供たちが自分たちの力で課題を解決しようとすることは、直接指導と比べ時間がかかったりする場合もあるが、それ以上に育つものが多いことが分かってきた。また、児童同士が自分たちで学び合う力を低学年のうちから育てていくことが、子供たち同士で授業を作り上げる上でも必要であると考え、複式スタイルの学習を進めてきた。

そこで、今年度は、育成を目指す 3 つの資質・能力として、「自ら行動する力【主体的な学び】・人を大切にする力【対話的な学び】・考え抜く力【深い学び】」を設定し、カリキュラム・マネジメントの視点を大切にして授業の改善を図っていく。複式学級の強みを「探究型学習」に向けての授業改善に生かしていくこととした。

③　児童の実態から

本校の児童は、課題に対して一生懸命取り組み、仲間の考えを共感的に聞こうとする温かい雰囲気がある。しかし、自分の考えや思いを相手に伝える表現力や交流しながら自身の考えを広げたり深めたりする力には個人差がある。

そこで、自分の思いや考えを言葉でより伝わるように表現し、児童同士が話し合いを進め、根拠をもとにしたり具体物を使ったりして説明し、論理的な思考で課題を解決していけるような学習の支援の仕方を工夫していく。そうすることで、言葉によって双方向につながり、多様な考えを認めながら仲間と学び合う楽しさを味わい、学びを深めようとする態度を育てたいと考えた。

以上の理由から、今年度の研究主題を設定した。

（３）　育成を目指す資質・能力

☆　自ら行動する力【主体的な学び】 ☆　人を大切にする力【対話的な学び】 ☆　考え抜く力【深い学び】

（４）　研究の内容（授業改善の視点）

①　授業改善(教師主導から子供が学ぶ授業、子供が作る授業への転換:両間接支援の充実)

②　研究の日常化（学ぶのは日常的なこと。普段の授業を変えていく。）

③　教師の「子供の学びを見取り、価値づける目」を育てる。

子供の学びが成立しているかどうかを見取る教師の目を、授業研究の参観を通し養う。子供の姿が見えるようになるからこそ、日常の授業で子供とかみ合うようになるとともに、適切な支援ができるようになると考える。(研究会は「参観者が学ぶ場」と捉える。)

≪育成する資質・能力の観点から≫

☆　自ら行動する力【主体的な学び】

・自ら学ぶ力の育成（児童が学習の見通しを持ち、自分たちの学びを作るために、学び方の支援、問いかけや「単元づくり」「授業づくり」を児童の実態や教材の特性に合わせて計画する。）

・個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図っていく。(目標達成までの道筋や追求課題の相違をとらえた授業展開や教材研究。カリキュラム･マネジメントの活用)

・ICT 機器の日常的活用をする。(学びの個人差や、考えの共有への対応)

☆　人を大切にする力【対話的な学び】

・違いを優劣なく認め、互いを尊重し合う学習を仕組む。(考えの広がりや深まりのある主体的な話し合い通して、みんなで学ぶことのよさが実感できるようにする。)

・自己対話を通して、合意形成の積み重ね（当事者意識を持たせることを大事にし、子供同士で言葉をつなぐ。）

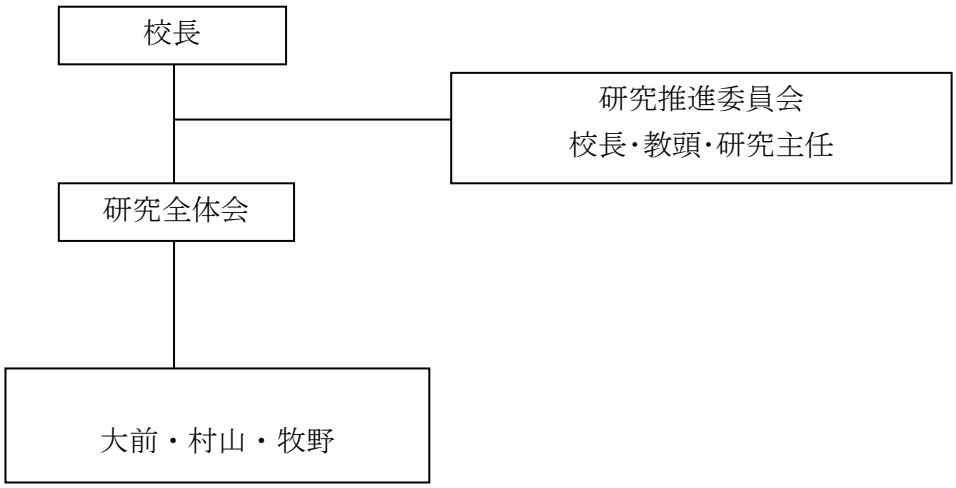
☆　考え抜く力【深い学び】

・自己決定する場の積み重ねのある学習を展開する。(自分の学習の振り返りを次時につなげるとともに、「個に返す」指導と評価の一体化を行う。)

・学習で知識同士をつなげて活用する。(他教科で得た知識を教科横断的な学びの中で結び付けていく。)

・課題に対して粘り強く解決し、挑戦する意欲を持たせる。(課題解決の手段や、伝え方は子供が自分で決定できるように支援する。)

（５）　研究組織



（６）　研究の進め方

（授業研究会について）

①一人２回の授業研究会

・１回は指導案（A4　１枚程度）もう一回は指導案なしで行う。

・教科は、１つは国算のどちらか、もう１つは授業者が希望する教科や領域。

②特別な授業（日常的に準備することが困難な授業）でなく「**日常の授業**」を行う。

③子供の姿を通して授業を見る。

④指導主事等は必要に応じて招聘し指導を受ける。（指導案を送付）

⑤参観の観点は基本各自（「子供の姿から学ぶ」ことは共通）

（事後研究会について）

①　子供から学んだことを語る。

◇授業の中で、子供一人一人の学びが成立していたか。

◇子供の学びの変容を見取ることができたか。

◇変容したのはなぜか？教師の支援？友達の発言？自己内対話？

◇子供の思考の流れを見取ることができたか。

②　事後研での助言や批判はなし

◇授業をする際の心理的安全性の確保（教員を評価する場ではないことを確認。）

◇肩の力を抜いていつもの授業を。授業について一番考えているのは授業者である。

③　授業者からはもちろんのこと、子供から学ぶ。

④　参観者が学んだことを言語化する。（これを研究紀要に入れる。）

・自分は、子供から何を学んだか。

・自分は、授業者から何を学んだか。

・自分は、今後の授業をどのように進めていきたいか。

・自分の授業観について変化があった場合どのような変化があったか。

・みんなで共有したいこと。

（７）　研究計画

期日	校時	学年	教科	授業者	事前研
５月　９日（火）		全体研修会「研究概要と指導案について」			
６月　７日（水）	２	５．６年	国語	牧野　由香	
６月２８日（水）	２	３．４年	算数	村山　智香	指導主事招聘
７月１２日（水）	２	１・２年	算数	大前　圭史	
１０月１８日（水）	２	５．６年	国語	牧野　由香	指導主事招聘
１１月　１日（水）	２	３．４年	国語	村山　智香	
１１月２２日（水）	２	１・２年	算数	大前　圭史	指導主事招聘
１月３０日（月）		研究全体会「研究の成果と課題・次年度に向けて」			
２月		研究集録発行（データ）			

１・２年生の実践

算数科　　単元　１年　おおきいかず

　　２年　九九をつくろう

指導者　大前　圭史

１　はじめに

今年度、本校では、育成を目指す資質・能力として「自ら行動する力・人を大切にする力・考え抜く力」を設定し、育てたい資質・能力系統表をもとにして授業の改善を目指している。本単元では主に、１年生で「人を大切にする力」、２年生で「自ら行動する力」「考え抜く力」の育成をねらって授業を進めていきたいと考えた。

２　実践

１年生では目指す資質・能力を「相違点など、自分の考えと比べながら聞く力」とし、次の点に留意しながら授業を行った。

① 友達の考えを聞き合う時間を設定し、自分の意見を言ったら終わりではなく、同じ、違う、似ているなど自分の考えと比べながら、友達の考えから学ぶよさに気付かせる。

② 友達の考えを理解しようとして聞き、よさを認めたり取り入れたりできるように、「誰の考えが分かりやすいか。」「なぜ分かりやすくなるのか。」などと考える視点を与えて聞く場面を設定した。

１年生は、自分の考えをまとめた後に、友達と自分の考えを自由に交流させた。自分の考えと同じ考え方をしている友達や少し違う友達の考えを比べ、「ここは似ているね。」「ここは少し違うね。」などと話し合いながら、互いの考えを比べたら、１０のまとまりの作り方や数え方が２ずつ、５ずつ、１０ずつ数える方法に変容が見られた。

また、友達の発表を全体で聞く際に、子供たちに「誰の考えが分かりやすいか。」「なぜ分かりやすくなるのか。」などと考える視点や聞く視点を与えたことが、子供たちが自分事として友達の話を聞くことにつながったと思われる。自分の考えと比べ、理由を考えながら最後まで共感的に話を聞くことで、ばらばらに 10 のまとまりをつくると数えにくいことや、10 のまとまりの作り方を工夫するとより数えやすくなることに気付くことができ、その後の数の数え方に変容が見られた。

２年生は「分かったことや分からないことを明確にし、課題解決に向かおうとする力」

「めあてに向かって粘り強く努力する力」を付けるために次の点に留意しながら、授業を行った。

① 習熟・定着・練習問題の時間では、各時間のめあてを自分で設定し、個人で学習内容を選択して自主的に学習する活動を取り入れる。

② 自分で活動のめあてを設定し、個人で学習内容を選択して活動を行い、できたこと、分かったことを受けて、さらにできるようになりたいことや知りたいことなど関心が向けられるような振り返りを行えるようにする。

２年生では、個々の進度に合わせて自分で活動のめあてを設定し、活動内容を自己選択して学習する時間を設定した。その結果、友達と進んで関わったり、個人の学習に励んだりして自分の設定しためあてを達成しようとする姿が見られた。例えば、６の段を暗唱するのに苦手意識を持っていた児童が何度も計算カードにチャレンジして自分の苦手を克服しようとする姿が見られた。

また、「九九めいろ」を選択した児童が、１の段だけ書いて取り組むのはどうなのかと友達と相談したところ、自分の力にならないから止めた方がいいと言われたことに納得して、色々な段を迷路に書きこむ姿があった。友達と一緒に高め合い、めあてに向かって努力する雰囲気が作られていた。さらに、ホワイトボードを用いて九九の問題を出し合い、かけ算の問題の出し方をどのようにすると伝わりやすくなるのかを互いに話し合い、問題文の書き方が分かりやすく変容する姿も見られた。安心して学習できる共感的な雰囲気や興味を引く教材の工夫、適度な友達との関わりの場を設定できたからだと思われる。

３　おわりに

・　１年生は、友達の発表を聞く視点を与えることによって、自分と友達の考えを比べ相違点や類似点を考えながら話を聞こうとする力が少しずつ付いてきた。

・　２年生は、個々にめあてを設定し、それに向かって努力し、できたこと分かったことを受けて、さらにできるようになりたいことや知りたいことなどに関心をもつなど、次時につなげる振り返りができるようになってきた。

・　子供の実態を見取って声がけをし、その子に合わせた支援をしたり、子供と子供をつなぐコーディネートをしたりすることで、算数での友達の考えから新たな視点をもてるようにしていく場面を増やしていくことが今後の課題である。

３・４年生の実践

算数科　　単元　３年　あまりのあるわり算「わり算を考えよう」
　　４年　小数のしくみ「小数のしくみを調べよう」

指導者　村山　智香

１　はじめに

今年度、本校では、育成を目指す資質・能力として「自ら行動する力・人を大切にする力・考え抜く力」を設定し、カリキュラム・マネジメントの視点を大切にして授業の改善を目指している。本単元では主に、３年生で「人を大切にする力」、４年生で「自ら行動する力」をねらって授業を進めていきたいと考えた。

２　実践

３年生では「友達の話を共感的に聞く力」を付けるために次の点に留意しながら、授業を行った。

① 話し合いの内容を簡単にしたり、話し合いの時間を短くして集中できるようにしたりすることで、共感的に聞く力を育てる。

② 子供の思考を大切にしながらつぶやきを拾って整理することで、子供の考えをつなげる。

授業では、３年生は、みんなあきらめずに取り組むことができた。それは、友達がまちがいや失敗を許し、励ますことができることと深く関係しているように思われた。

ある児童は、取り組むまでに時間を要したが、その後、具体物で操作したり、黒板の前に来て友達の話を聞いたりして学習を深めていた。これは、集中していないように見えていた時にも、その態度を否定されなかったことが次の行動につながったのではないかと考えられる。

また、悩んでいる友達に寄り添ったり、友達の間違いをすぐに切り捨てず、なぜこのように考えたのかを一緒に考えたりする場面が見られた。さらに、説明しているときに「ここまでいいですか。」と相手の身になって話している様子が見られた。この「人を大切にする行動」が次の主体的な学びにつながったのではないかと考えられる。

４年生では「課題解決に向かって、自分事として取り組む力」を付けるために次の点に留

意しながら、授業を行った。

① 課題をとらえる場面での直接指導によって興味を持たせ、本時の学びに見通しを持つことで、課題を自分事としてとらえさせ、自分たちで学びを進められるようにする。

② 全体で考える課題を比較的簡単なものにすること、それぞれのレベルで練習問題を解くことができるような工夫をすることで、意欲的に学習に向かうことができるようにする。

４年生では、考えを共有する時間が充実していた。間接指導の時間であったが、自分たちで意見を出し合って進めており、「～だから」「見えない０をたして」など、根拠を明確にして人に説明しようとしていた。また、矢印や不等号など多様な方法を使って、思考を見えるように表現していた。

また、友達の考えを「同じです。」「いいです。」と流すのではなく、「えっ、ここは～じゃないの。」と聞き返す様子も見られた。

さらに「全然分かりません。」「もう少し考えたい。」など自由に声を出すことができでいた。

これらのことは、自分事として取り組んでいるからではないかと思われた。「何とかして説明したい」「自分で考えてみたい」などの思いが言動に現れたと考えられる。

３　おわりに

・　誰一人取り残さないために「見通しを持たせて必要な情報を与える」「見通しを持たせて必要な情報を与える」「子供たちを信頼し、活動を価値付ける教師の言葉をかける」「個に合わせて、必要な教材や教具を準備しておく」「まちがいを否定しない温かい雰囲気の学級経営をする」などの手立てをとるとよいのではないかということが分かってきた。

・　子供の実態を見取って活動を支援することが大切である。しっかり行動を見取ることにより、教師の声掛けの仕方が変わってくることが分かった。

・　算数科では、数の概念を形成したり、数学的な考え方を身に付けたりすることが重要である。授業の話し合いの中で、考えの形成、多様なものの見方を養うことが必要である。そのために、単元計画を精査し、本時にどんな力を付けるかの見通しを持っておくことが必要であった。

５・６年生の実践

国語科　単元　５年　互いの立場を明確にして考えよう

「よりよい学校生活のために」

６年　目的や条件に応じて、計画的に話し合おう

「みんなで楽しく過ごすために」

指導者　牧野　由香

１　はじめに

今年度，本校では，育成を目指す資質・能力として「自ら行動する力・人を大切にする力・考え抜く力」を設定し，育てたい資質・能力系統表をもとに授業の改善を目指している。本単元では、５・６年生ともに「自ら行動する力」「人を大切にする力」を育てる授業を進めたいと考えた。

２　実践

５・６年生が学習の単元計画を作る前に、資質・能力系統表を活用し、自分たちがこの単元でどのような力を身に付けるかを確認した。

５年生では目指す資質・能力を「課題解決に向けた見通しをもって、自分たちで学びを作る力」「目的や相手を意識した表現力」とし、次の点に留意しながら授業を行っ　た。

① 「学習で何を学か、学習のゴールは何か」の見通しを持って単元計画を作り、自分たちで学習を進めるようにする。

② 議題に応じた自分の立場を明確にして話し合い、他者の考えを比較しながら聞く。自分の考えをまとめるために、話の進め方の計画を作り、話し合った内容が視覚化できる付箋を使った学習シートを活用して表現する。

５年生は、「廊下を安全に歩くためにできることは何か」をテーマに、自分たちで取り組みたいことの違いをもとに２つの班を作り、学習シートや話し合うための視点も学習内容に合わせて決めた。

まず、一人一人が自分の考えを明確に持ってから、班の中で４つの視点に沿って話し合いを深め、実現できるかできないかについて、学習シートを活用して話し合った。話し合いの様子を録画して、国語科としての話し合いの進め方を確認し、次時の話し合いに生かそうと振り返った。また、事前に自分の考えを書いていた付箋だけでなく、話し合いながら新たな考えを書いた付箋を増やしたり、直接学習シートに書き込んだりして考えを深めていた。

考えがまとまったところで、２つの班で共通点や相違点を考えた。そこから、５年生として何をしていくかを話し合い、５人の考えをまとめた。子供たちは互いの立場を明確に話し合うことを通して、自分の学びを振り返り、次時に生かそうとしており、学習リーダーを中心に進める力が付いた。

６年生は目指す資質・能力を「課題解決に向けた見通しをもって、自分たちで学び

を作る力」「目的や相手を意識した表現力」「よりよいものを求めて粘り強く解決する力」とし、次の点に留意しながら授業を行った。

① 子供が中心となって単元計画を作ることで、学習課題の設定、ゴールを見通して学びを進められるようにする。学びを自分事としてとらえ、よりよい解決に向けて考え抜けるようにする。

② 言葉を通じて積極的に人と関わり、目的や条件に応じて、見通しを持って話し合う場を設定する。自分の考えや根拠を明確にしながら、話し合った内容を視覚化できる思考ツールを活用する。

６年生は、「みんなで楽しく過ごすために」を議題に、考えが広がるように自分たちで２つの班にすることを決め、思考ツールも議題に合わせ、て自分たちで決めた。学習課題も「目的や条件をはっきりさせてグループで話し合い、共有して感想を伝え合う」と決定していた。この課題に沿って、班ごとに話し合いを深めていった。相手に質問したり、意見を言ったり、メモしたり、リーダーとして話を進めたりすることができた。２つの班の考えをまとめる時も国語科として身に付ける話し合いの形式を保ちつつ、自由に発言していた。友達の考えを否定せず、対話が受容的に聞く力があったからだと考えられる。また、６人全員が課題を自分事としてとらえ、よりよい活動にしようとする姿があった。本時の振り返りでも、教科書に戻って自分の学びを確認している児童も見られた。この「人を大切にする行動」が次の主体的な学びにつながったのではないかと思われた。６年生は、目的や条件を意識して考える力を用いてよりよい学びを求めて、粘り強く努力し解決したり、生活に生かしたりする力が付いたと思われる。

３　おわりに

・　５年生では、間接指導から直接指導にうつったときに、教師が子供の思考の流れや学習過程を整理するために言語化することで、子供たちが自分の学びの振り返りを次の学びへとつなげようとする力が付いてきた。

・　６年生は、複式で６人の意見をさらに広げるために、誰かに伝えるというプロセスを通して、自分の言葉でまとめ担任に伝えるなどの場を設定することで、よりよいものを求めて粘り強く解決する力が付いた。

・国語科では、言葉による見方・考え方、言葉への自覚を高める力を付けることが重要である。国語科の究極の目標は、「言葉で正確に理解し、適切に表現する資質・能力」を育成する授業である。本時の「話し合い」では考えの形成、共有、考えを広げる、深めるということを授業で身に付けられるように、単元計画を精査していくことが必要であった。

今年度の学校研究の成果と課題と来年度へ向けて

（成果○　課題●）

１　研究主題について

○「誰一人取り残さない　子供が育つ授業づくり」という主題に沿って研究を進めることができた。
○主題が学校教育目標とつながっていて、向かっていく方向がぶれなかった。
＊研究主題は、来年度も継続していく。

２　研究の内容（資質・能力を中心として）について

今年度は、たくさんある非認知能力の中から、以下の３点を育てることに重点を置いた。

自ら行動する力

○各学級の実態や個々の子供の学ぶ姿から、担任が見取ったことを基に授業を展開していた。
○授業の中にも、自己選択したり自己決定したりする場面などを設ける工夫が見られていた。
○自分のめあての設定をし、自分で学習を振り返ることで、自己調整力が身に付き、より主体的な姿に近づいていくのだと思った。
○教材の工夫や、子供たち同士が関われる環境設定が各学級で設けられており、主体的な姿が見られた。

人を大切にする力

○共感的に聞く、相手を否定しないで聞くことを、どの学級でも大事にして授業がつくられていた。
○学校教育活動全般を通して育てるべきものだと感じた。これがなくては、協働的な学びはできないと思った。
○人を大切にするという意識が安心安全につながり、自ら行動する力、考え抜く力につながっていくのではないかと思った。

考え抜く力

○単元計画を児童と作り、単元のゴールを明確にすることで課題・解決方法・まとめ・振り返りの見通しを持って学ぶことができた。高学年は、国・算・理・社の４教科で単元に合わせて自分体で自由進度学習ができるようになってきた。
○どのようにして学習への意欲を持たせるかが非常に難しかった。学習意欲のないところに考え抜く力は育たない。→土台は学級経営

＊以上をまとめると、
○育てたい資質・能力を視点に、子供の実態に合わせた授業をつくったり、子供の変容を見取ったりしたことで、一人一人のつぶやきや困り感に対応した支援についての理解が

深まった。

○研究授業を何年も経験してきたが、何をねらうか、どこを見るか、何を学ぶかで、授業のやり方はもちろん、事後研での話し合いも違ってくる。大きな変化だった。

●育てたい資質・能力を身に付けさせるには、土台となる非認知能力を大切に養うことが根底にあることを、教職員間で共通理解することが必要である。

●資質・能力系統表を子供たちと共有しながら、授業つくりをしていくことが必要であり、大事であると思う。

●３つの資質・能力が育つ授業づくりに取り組んできたが、さらに、「学び方を振り返るための手立て(自己調整力の育成)」「見取りを生かした授業づくり」などが課題である。また、資質・能力の育成と同時に、「教科としての見方・考え方を働かせたか」という視点を持った授業つくりをどのように進めていくか、さらに考えていく必要がある。

＊育てたい資質能力は継続していく。加えて「教科における見方・考え方」についても授業の中で意識して取り組んでいく。

＊学習の土台作りは、非認知能力を高めることが大切である。自己調整力を育てることが課題だと分かった。①学び方を振り返る力を付ける②自律的な学びができる授業づくりを授業者が視点として持ち、学年の発達段階に応じた学級経営を基盤として授業をする。

例)「考え抜く力」挑戦と創造：授業を通して粘り強く取り組み、新しいことを生み出していく力を付けていく。例）２０歳になった時に分からないことを探求する力

３　子供の見取り方について

授業に生かす教師の見取りの力を付けることが大切である。

○写真で記録を残すことによって、具体的な子供の姿をもとに、一人一人が見取った子どもの学びの様子を交流することができた。

●一人の子供の変容を見取り続けるか、直接指導時の子供の様子やつぶやきを見るか、間接時の子供の様子を見るかなど、参観時の子供の見取りをどのように行うことが見取る目を鍛えることにつながるのか検討が必要である。

●一人の子供の変容を見取り続けようとすると、気になる子供が他の参観者と重なることが多く、事後研での協議会で同じ見取りになってしまうことが何度かあった。

＊教師の見取る力とそれに対応した一人一人への支援の在り方は、継続していく。

＊「子供に力を付けるために」一番学ぶのは、授業者である。自分の授業にどう結び付けていくかを考えて参観する。見取ることを目的とするのではなく、子供の学びを価値付ける見方、支援をして力を付ける授業づくりを実践する。

＊授業研究会は、「日常の授業を検証する場」ということであり、新しいことや普段できないことをする場ではないことをみんなで共通理解する。日常的に提案し、気軽に授業を見合うことが実践に結び付くと考える。

４　研究会のあり方について

＊事後研は、

①どうしていけば子供や授業者に力が付くかを確認する。

②研究会での学びを、今後の自分の授業作りにどう生かすか

を目指して話し合いを進め、全員が話せるように実施する。

＊授業の記録が必要であれば、ビデオで撮影する。(子供を追った写真での記録は残るが、教師の発問だったり、子供の発言だったり、教材教具の工夫だったりの記録が残らない。研究紀要に何を残すかによって、何を記録として残すかを考える必要がるという反省から。)

５　その他

＊授業研究会は今年度と同様。参観者が学ぶ研究会ととらえる。
＊指導案は今年度同様にＡ４、１枚での作成とする。指導計画と本時のどちらを詳しく記述するのかは、今後の検討課題である。
＊学び方が新しくなっている、社会が変化していることに授業者が対応していくために、自ら学んでいく。
＊校長・教頭が普段の授業を参観し、共に授業について考える機会を来年度も実施していく。月に１回ができなかったので、来年度は、最低学期１回は実施したい。
＊研究だよりは、1回目は今年度の授業研究会について、２回目からは事後研記録を兼ねて研究主任が、参観者の学びも含めてまとめる。授業者も自分の授業についての考えをまとめ、研究紀要の実践のまとめに生かせるように書く。
＊学校研究のまとめを２学期末に実施し、１２月中にまとめ、次年度の研究に生かせるようにする。

第１学年　算数科学習指導案

令和５年１１月２２日（水）　　指導者　大前　圭史

１　単元名・教材名　　「おおきいかず」

２　目標（知）２位数や簡単な３位数について、数え方や読み方、書き方、数の構成、大小などを理解する。120 程度までの数を数え数字を読んだり書いたり、数の構成を加法や減法の式に表したりすることができる。
（思）既習の数の表し方の仕組みを基に、120 程度までの数の数え方や読み方、書き方を考え、言葉やブロックなどを用いて表現したり、数の構成や既習の計算を活用して簡単な場合の２位数の加減計算の仕方を考え、言葉やブロックなどで表現したりできる。
（態）数の構成を活用して、数の数え方や加減計算の仕方を考えた過程や結果を振り返り、そのよさや楽しさを感じながら学ぼうとしている。

３　単元・本時の構想について

在籍児童４名は、複式学習のリーダーを半年間経験することで、学習の進め方が少しずつ身に付いてきた。特に算数科では、自分の考えをもち友達に説明したり表現したりすることを進んで行える。一方、友達の話を最後まで聞いたり、共感的に聞いたりすることが苦手である。そのため、聞き方の指導をしながら、発表をしたり聞き合ったりする場を大切にしてきた。

本単元では、２位数や簡単な３位数について、個数の数え方や数の読み方、書き方、数の構成などを学ぶ単元である。児童が、具体物や半具体物、言葉を用いて表現したり、既習内容を活用して簡単な２位数の加減計算をしたりして学習をすることで、１０を単位として数を捉える力や数の構成に着目して計算の仕方を考える力を養わせたい。

「人を大切にする力」の育成をねらい、友達の考えを聞き合う時間を設定することで、友達の考えから学ぶよさに気付かせていく。話を聞くことが苦手な児童については、友達と自分の考えを比べたり、友達の良い考えを見付けさせたりすることで、最後まで共感的に話を聞くことができるようにしたい。

４　指導計画（１４時間　本時４時間目）

時数	主な学習内容	時数
1・2	２位数の数え方を考え、唱え方と位取りの原理と記数法を考える。	2
3～6	２位数の数え方の理解、100 の唱え方、読み方、書き方	4
7	数表を使った、数の並び方の規則性や構成の理解	1
8・9	100 までの数の系列、大小 120 程度までの唱え方や係数の理解	2
10～12	２位数の数の構成に基づいた計算	3
13・14	学習内容の生活への活用、単元の学習を振り返る。（ワークテスト）	2

第２学年　算数科学習指導案

令和５年１１月２２日（水）　　指導者　大前　圭史

１　単元名・教材名　　「九九をつくろう」

２　目標（知）九九について知り、乗法に関して成り立つ性質の理解を確実にするとともに、乗法が用いられる場面を絵や図、言葉、式で表したり、九九を構成し、確実に唱えられたりすることができる。
（思）数量の関係に着目し、乗法について成り立つ性質やきまりを用いて九九の構成の仕方を考え工夫し、表現できる。
（態）数学的に表現・処理したことを振り返り、数理的な処理や、乗法について成り立つ性質やきまりを用いることの良さに気付き、今後の生活や学習に活用しようとしている。

３　単元・本時の構想について

在籍児童４名は、算数の学習に進んで取り組んでいるが、理解力と表現力の個人差が大きい。九九をあらかじめ覚えてきてから学習に臨む児童や、九九にあまりなじみのない児童がいるため、個人の習熟定着の時間では一律に同じ内容に取り組ませるのではなく、各自の能力に応じて自由進度で自主的に学習する時間を設けるようにしてきた。

本単元では、かけ算九九の計算の意味や計算の仕方を考えて九九を確実に唱えられたり、性質やきまりを見い出したりすることができるようにする。そのために、九九の構成の仕方を図や表を用いて考えることができるようにする。

習熟・定着・練習問題の時間では、「自ら行動する力」「考え抜く力」の育成をねらい、自由進度で自主的に学習する場面を取り入れている。自分でめあてを設定し、めあてに合った学習を行い、良かった点や改善点など次回を見据えた振り返りをすることで、自己調整力を育成していきたいと考えている。

４　指導計画（１７時間　　本時３時間目）

時数	主な学習内容	時数
1～10	6～9 の段の九九の構成、暗唱と適用、九九を用いた問題解決	１０
11	１の段の九九の構成、暗唱と適用、九九の習熟・定着	1
12・13	九九表を見なおし、乗法の性質やきまりをまとめる。乗法の性質やきまりを活用し、乗法の答えの求め方を考える。	2
14	倍を用いた問題解決	1
15・16	九九を総合的に活用、学習内容の習熟・定着	2
17	単元の学習を振り返る。（ワークテスト）	1

（1）本時の目標　１０のまとまりを意識して２位数を数えることができる。　６の段の九九を適用し、自分の学習の成果と課題を振り返ることができる。

（2）本時の展開

【１年】　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　【２年】

指導・支援上の留意点 評価	学習活動	直	間	学習活動	指導・支援上の留意点 評価
・話し合いがしやすいように、問	1　課題をつかみ、見通しを持つ。	■	□	1　６の段を全員で唱える	・活動の見通しをプリントで示す。
題をプリントで配布する。		■	□	2　九九カードタイム。	・６の段をばらばらに唱えられるよ
・１０のまとまりを作ると数えや	㊢分かりやすく数をかぞえよう。	■	□		うにする。ストップウォッチを用
すいことを確認する。		■	□		意して、時間を意識させる。
・めあてを一人一人が設定する。	2　活動のめあてを考え、自力解決に	□	■	㊢６の段を使って自分の力を	
・プリントを用いて、問題を解か	取り組む。	□	■	のばそう。	
せる		□	□	3　活動の計画を考える。	・自分に合った進度で学習する計画
・１０のまとまりを作る工夫を確	3　全体で考えを共有する。	■	□		を一人一人が設定する。
認する。		■	□		
・算数ブロックを使って数の表し		■	□	4　ぐんぐん学習に取り組む。	・活動を自分で選択して行えるよう
方を確認する。	㋮１０のまとまりを作ると数が数	■	□	・九九カードチャレンジコース。	に場の設定を分かりやすくする。
・１０のまとまりを作る良さに目	えやすくなる。	■	□	・問題作りコース	・個人で活動しても自由に交流を行
を向けさせる。		□	□	・プリント　コース別で	っても良いようにする。
「１０のまとまりがいくつと	4　適用問題を解き、友達に考えを発	□	□	・算数の力　・計算スキル	・めあてと活動を振り返り、今の活
単数がいくつ」という数の見方	表する。	□	□		動が適しているか振り返らせる。
を活用することができる。（発		□	□		
表）	5　本時の振り返りをする。	■	■	5　本時の振り返りをする。	・振り返りのポイントを掲示する。
・振り返りのポイントを掲示する。	①　＋　よかったところ	■	■	①　＋　よかったところ	自分の活動のねらいと照らし合
・異学年で振り返ることで、より	②　－　直したいところ	■	■	②　－　直したいところ	わせて６の段の九九を適用できた
お互いの考えの広がりや深まりに	③　→　次に頑張るところ	■	■	③　→　次に頑張るところ	かを、振り返りで自分の学習の成
気付かせる。		■	■		果と課題を書くことができる。（観察・ノート）

■直接指導　□間接指導

第３学年　算数科学習指導案

令和５年６月２８日（金）　　指導者　村山　智香

１　単元名・教材名　　あまりのあるわり算「わり算を考えよう」

２　目標　わり切れない場合の除法や余りについて理解し、計算することができるようにするとともに、数学的表現を適切に活用して、除法の意味や計算の仕方を具体物や図、式を用いて表し、問題場面における数量の関係に着目しながら、数学的に処理した過程を振り返り、今後の学習や生活に活用しようとする態度を養う。

３　単元・本時の構想について

在籍児童４名は、理解力や表現力、および学習に向かう姿勢において大変個人差が大きい。話を聞くことに集中できず、内容を理解することが苦手な児童や、共感的に聞くことが苦手な児童がいるため、これまでは話し合いの時間を極力短くし類題を解く時間を多くするように心がけてきた。また、個人差に対応できるよう問題の量や質の高さを調整するようにしてきた。

本単元は 余りのあるわり算について理解する単元である。余りの意味について理解し、今後の学習や生活に活用しようとする力を付けたい。そのためにはじめは、おはじきの操作などを通して、包含除や等分除の意味、余りの意味を理解させていく。

今年度、学校として「人を大切にする力」の育成を目指している。本学年の児童には、授業を通して、共感して聞く力を付けていきたい。まだ、共感的に聞くことが十分でないので、話し合う時間を短くしたり、内容を簡単にしたりするなどの工夫をしていく。

学習に向かえない児童については、友達と同じ時間に同じことが出来ないことも考えられるが、様子を見ながらその児童にあった支援ができるよう心がけていく。また、理解力の高い児童にとっては、難易度が低くて意欲が持てないことも考えられる。そのため、考えの根拠を明らかにしたり、友達同士で説明したり、問題の質を変えたりするなどの工夫をしていきたいと考えている。

４　指導計画（７時間　本時２時間目）

小単元	主な学習内容	時数
１あまりのあるわり算	・あまりのある包含除の計算の仕方を考える。 ・あまりのある等分除の計算の仕方を考える。 ・除法計算の答えの確かめ方を考える。	5
２あまりを考える問題	・問題場面に応じて、余りのとらえ方を考える。	1
まとめ	・習熟、定着	1

第４学年　算数科学習指導案

令和５年６月２８日（金）　　指導者　村山　智香

１　単元名・教材名　　小数のしくみ「小数のしくみを調べよう」

２　目標　小数の意味や表し方について理解し、加法および減法の計算をすることができるようにするとともに、数学的表現を適切に活用して小数のしくみや計算の仕方を考え、十進位取り記数法を基に整数や小数の仕組みを考えた過程を振り返り、日常生活に生かそうとする態度を養う。

３　単元・本時の構想について

在籍児童７名。うち１名は長期欠席中のため６名で学習を進めているが、学習に向かう姿勢やこれまでの学習の定着に非常に大きな差がある。これまでの学習が身に付いないために新しい学習に意欲が持てない児童や、話を集中して聞くことが苦手な児童、手順をとばしてしまい正解にたどりつけない児童など、様々な特徴を持っている。また、算数が好きで、理解力計算力の高い児童もいるため、これまではそれぞれのレベルで学びを深められるように授業の展開を工夫してきた。

本単元は、小数の表し方や計算の仕方も、整数と同じ考えで進めることができることを学ぶ単元である。十進位取り記数法の仕組みに着目して、100 分の１や 1000 分の１の位までの小数の表し方を学習する。

今年度、学校として「自ら行動する力」の育成を目指している。本学年の児童には、課題を自分事としてとらえさせ、自分たちで学びを進めることができるようにしたい。そのために、間接指導を基本としながら、課題をとらえる場面に直接指導をするなど指導の仕方を工夫する。

これまでの学習の定着が不十分なため、新しいことを学ぶことに困難さを感じる児童が多くいるだろうと予測されるが、本単元を学びながら、整数も同じような仕組みになっていることに気付いていくこともあると考えている。

４　指導計画（１３時間　　本時４時間目）

小単元	主な学習内容	時数
１小数の表し方	・100 分の１、1000 分の１の位までの小数の表し方を考える。	2
２小数のしくみ	・小数の構成や位取りの原理、大小関係を考える。 ・小数を 10 倍した数、10 分の１にした数について考える。	4
３小数のたし算とひき算	・小数の加法、減法の筆算の仕方について考える。 ・合成、分解、相対的大きさに着目し、小数の多様な見方を養う。	5
まとめ	・習熟、定着	1

（１）本時の目標　具体物操作や図での表現を通し、余りと序数の関係を理解する。　　十進位取り記数法を用いて、小数の大小関係について理解する。

（２）本時の展開

【３年】　　【４年】

指導・支援上の留意点　評価	学習活動	直間		学習活動	指導・支援上の留意点　評価
	１課題をつかみ、見通しを持つ。	■	□	１復習プリントをする。(6 分)	・本時の課題とかかわりのある復習問題を準備する。
・２つの考えを提示する。 13÷4＝2 あまり 5 13÷4＝3 あまり 1	問あめが 13 個あります。1 人に 4 個ずつ分けると、何人に分けられて、何個あまりますか。	■ ■	□ □		
		□	■	２課題をつかみ、見通しを持つ。	・直接指導にすることで、課題を自分事としてとらえられるようにする。
・５個の余りはおかしいことを確認する。	課わる数とあまりの大きさについて考えよう。	□ □	■ ■	問小数の大きさをくらべよう。 2.43　2.466　2.408　2.48	・「簡単だ」と言う児童がいると予想されるので、理由を説明できるように考えさせる。
	２課題について話し合う。	□ □	■ ■	課小数の大きさの比べ方を考えよう。	
・理由を言葉で書ける児童とどう書いていいか分からない児童がいると予想される。友達同士で話し合わせたい。友達の考えを共感的に聞けないことが多いので、学習指導補助員に寄り添ってもらう。	３わかったことをまとめる。	■ ■	□ □	３課題について考える。	・位取り表や数直線を準備しておく。必要性を感じた時に提示する。
・「わり切れる」「あまり」「わる数」などの算数用語を大切に扱うようにする。	まわり算のあまりは、わる数より小さくなる。	□ □ □	■ ■ ■	４考えを発表し合う。 ・わかったところまで発表することにする。 ・まとめる。	・どう考えていいかわからない児童が４名いると予想される。聞くことや友達と一緒に考えることも認めるようにする。
・ふり返りのポイントを示す。	４本時のふり返りをする。	□ □	□ □	まと整数と同じように上の位から比べる。	・自力解決の時間は短くする
余りが除数よりも小さくなることを理解し、計算することができる。　（観察・ノート）	①　あまりのある計算問題を解く。 ②　文章や言葉でふり返る。	□ □ □	□ □ □	５本時のふり返りをする。 ①練習問題をする。 ②文章や言葉でふり返る。	・ふり返りのポイントを示す。 小数大小関係を比較する方法を考え、理解することができる。（観察・ノート）

■直接指導　□間接指導

第５学年　国語科学習指導案

令和５年１０月１８日（水）　　指導者　牧野　由香

１　単元名・教材名　　たがいの立場を明確にして、話し合おう
「よりよい学校生活のために」

２　目標（知）情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことができる。
（思）互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、考えを広げたりまとめたりすることができる。
（態）互いの立場や意図を明確にしながら、学習の見通しを持って、身の回りの問題を解決するために、粘り強く話し合おうとしている。

３　単元・本時の構想について

在籍児童５名は、国語科の学習で「学習のゴールと何を学ぶか」の見通しを持って自分たちで学びを進めるために、単元計画作りに取り組んできた。その結果、学習課題が明確になり、課題解決の仕方や学びのゴールも自分たちで決めるようになり、主体的な学びになってきている。互いの立場を明確にして話し合うときは、立場が対立的な関係にある場合においても、異なる立場の考えを聞き、その理由を尋ね合うことで、互いに考えを広げたりまとめたりするように取り組んできた。

本単元では、議題に応じた自分の立場を明確にして伝え合い、他者の考えと比較しながら自分の考えをまとめる力を付けたい。そのために、単元計画作りの他に、立場を明確にした話し合いができるように、話の進め方の計画を作り、話し合った内容が視覚化できる付箋を使った学習シートを活用する。

今年度、学校として「自ら行動する力」「人を大切にする力」「考え抜く力」の育成を目指している。授業を通して、主体的に自分の立場を明確にしたり、他者との相違点を聞き取りまとめたりして、聞き手を大切にする力を付けていきたい。話すのが得意ではない児童もいるので、グループで役割分担をするなどの工夫をしていく。

４　指導計画（６時間　本時５時間目）

時数	主な学習内容	時数
１・２	・学校生活の中から、議題を決め単元計画を作る。 ・自分の立場を明確にする。	２
３	・話し合いの仕方を確かめ、進行計画を立てる。	１
４・５	・話し合いの工夫を整理し、観点を共有する。 ・互いの立場を明確にして話し合う。	２
まとめ	・話し合いの仕方についての気づきや感想を伝え合う。 ・単元の学習を振り返る。（ワークテスト）	１

第６学年　国語科学習指導案

令和５年１０月１８日（水）　　指導者　牧野　由香

１　単元名・教材名　　目的や条件に応じて、計画的に話し合おう
「みんなで楽しく過ごすために」

２　目標（知）言葉には、相手とのつながりをつくる働きがあることに気付くことができる。
（思）目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討することができる。
（態）言葉を通じて積極的に人と関わり、目的や条件に応じて、よりよい解決に向けて見通しを持って話し合おうとしている。

３　単元・本時の構想について

在籍児童６名は、今年度から国語科の学習で児童が中心となって単元計画を作り始めた。学習課題の設定・解決方法が分かり、学習のゴールまでを見通して自分たちで学びを進めることができる。算数科でも同じように単元計画を作り、教材によっては自由進度学習を取り入れられるようになった。

本単元では、言葉を通じて積極的に人と関わり、目的や条件応じて、よりよい解決に向けて見通しを持って話し合う力を付けたい。そのために、自分の考えの理由や根拠を明確にしながら、話し合った内容を視覚化できる思考ツールを活用できるように支援していく。

今年度、学校として「自ら行動する力」「人を大切にする力」「考え抜く力」の育成を目指している。本学年の児童は、常に３つの力を付けることを意識して、課題を自分事としてとらえ、自分たちで学びを進めることができるので、言葉を通じて積極的に友達と関わり、よりよい解決に向かう力を付けていきたい。

４　指導計画（６時間　　本時５時間目）

時数	主な学習内容	時数
１	・議題を確かめ、話し合いの目的と条件について、考えを出し合い、単元計画を作る。	１
２・３	・話し合いの仕方を確かめ、進行計画を立てる。 ・自分の考えを明確にする。	２
４・５	・主張や理由、根拠が明確になるように、自分の考えをまとめる。 ・話し合いの目的やそれぞれの相違点、問題点、改善点など、表や図を活用しながら、話し合う。	２
まとめ	・話し合った結果や感想、工夫した点などを報告し合う。 ・単元の学習を振り返る。（ワークテスト）	１

（1）本時の目標　互いの立場を明確にして、話し合いの結果を共有する。　　話し合いの目的やそれぞれの相違点、問題点、改善点などを話し合う。

（2）本時の展開

【5年】　　【6年】

指導・支援上の留意点　評価	学習活動	直間		学習活動	指導・支援上の留意点　評価
・自分たちで作った単元計画をもとに授業を始める。課題と話し合いの仕方をできるだけ児童たちで確認する。	1課題をつかみ、見通しを持つ。 課 お互いの立場を明確にして、話題について話し合おう。	■ ■ ■ ■ ■ □	□ □ □ □ □ □	1課題をつかみ、見通しを持つ。 課 話し合いの目的やそれぞれの相違点、問題点、改善点などを話し合おう。	・自分たちで作った単元計画をもとに授業を始める。課題と話し合いの仕方を児童たちで確認する。
・3人と2人つのグループで話し合う。進行係もいるが、できるだけ自由に発言できるようにする	2課題について話し合う。 ・話の軸を決めて、表を活用して整理する。	□ □ □ □ □	□ □ □ □ □	2課題について話し合う。 ・自分の主張や理由、今教が明確に話せるように、自分の考えをまとめたシートを活用して、話し合う。	・3人ずつのグループで話し合う。進行係もいるが、できるだけ自由に発言できるようにする。
・話し合いの時に活用した話の軸の表を活用して報告する。。	3話し合ったことを共有する。 ・グループ話し合ったことを報告する。	□ □ □ □ □	□ □ □ □ □	3話し合ったことを共有する。 ・グループ話し合ったことを報告する。	・報告の記録の仕方を事前に児童と決めておく。報告しやすい記録になるように支援しておく。
・ふり返りのポイントを示す。 互いの立場を明確にして、話し合いの結果を共有することができたか。(観察・ノート)	4本時のふり返りをする。 ②　自分の考えは、伝わったか。 ②友達の考えを理解できたか。	□ □ □ □	□ □ □ □	4本時のふり返りをする。 ①　自分の理由や根拠は、伝わったか。 ②　友達の考えの理由や根拠は、理解できたか。	・ふり返りのポイントを示す。 話し合いの目的やそれぞれの相違点、問題点、改善点などを話し合うことができたか。（観察・ノート）

■直接指導　□間接指導

様式Ａ－１

アクションプラン

学校名	記載者　職・氏名	≪職員会議や学年部会等、全職員によるアクションプラン共有の場≫			
		①作成時	②８月評価時	③１２月評価時	④２月評価時
河北町立谷地西部小学校	教諭　牧野由香	６月６日 学力向上対策会議	８月２３日 学力向上対策会議	１２月１１日 職員会議	２月１９日 職員会議

「確かな学力」の育成に向けて・・・つけたい力を明確にした、教科の本質に迫る授業の実践

(1)調査問題・児童生徒質問紙の分析と、育成を目指す資質・能力

①調査問題、児童生徒質問紙の分析等

NRTの結果から見えた課題△、日常から見たよさ○と課題・

【５・６年生】
国語　△敬語を正しく使い話す。
算数　△小学４年生の計算（小数のかけ算・分数のたし算）
○自分たちで学習を進めようという意欲が高い。
○相手に伝わる説明をしようとする意識が高い。
・図や式を使って表現させることを繰り返し行っているが、正確に伝えることは十分とは言えない。

【３・４年生】
国語　△文章を整え感想や意見を伝え合う。
　　△詳細を読み取って解釈する。
算数　△かけ算　　△分数
○自分たちで学びをすすめようとしている。
・作業の速さや正確さ、理解度及び学びに向かう姿勢に個人差が大きいため、進め方がわからなかったり、内容が理解できなかったり、言い合いになったりするなど、うまくいかないことが多い。

【１・２年生】
国語　△ていねいな言葉で話す。△大事なことを聞き取る。
算数　△数の構成
○課題に向かって、真面目に仲良く協力して学習に取り組んでいる。
・めあてに向かって粘り強く集中する力には個人差がある。

【全国学力調査から】

【国語】○必要なことを質問しながら聞き、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を伝えることができる。
○目的を意識して、中心となる語や文を見つけて要約する。
【算数】○伴って変わる二つの数量の関係が、比較の関係ではないことを説明するために、表の中の適切な数の組を用いる。○示された日常生活の場面を理解し、少数の加法や乗法を用いて、求め方と答えを式や言葉を用いて記述し、その結果から条件に当てはまるかを判断できる。
▼高さが等しい三角形について、底辺と面積の関係を基に面積の大小を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できる。（５年）△（）を用いた式や、加法と乗法の混合した式を場面と関連付けて読み取ることができる。（４年）
【質問紙から】○国語や算数の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つと思う。
△休日の家庭学習の時間が短い。学校の授業以外で英語を使うことが少ない。

②育成を目指す資質・能力

学校教育目標
誰一人取り残さない　子供が育つ学校づくり

【研究主題】
誰一人取り残さない　子供が育つ授業づくり

本校で育成を目指す資質・能力

	自ら行動する力 【主体的な学び】	人を大切にする力 【対話的な学び】	考え抜く力 【深い学び】
５・６年生	・自己と向き合い、主体的に課題に取り組む力 ・課題解決に向けた見通しをもって、自分たちで学びを作る力	・多様性(違い)を認め、尊重しながら聞き話し合う力 ・目的や相手を意識した表現力	・他教科で得た知識同士をつなげて活用する力 ・よりよいものを求めて粘り強く解決し、挑戦する力
３・４年生	・課題解決に向かって、自分事として取り組む力 ・友達と協力し、自分たちで学びを進める力	・自分の思いを書いたり話したりする力 ・友達の話を共感的に聞く力	・課題解決に向けて、粘り強く考える力 ・自分でめあてを設定する力
１・２年生	・分かったことや分からないことを明確にし、課題解決に向かおうとする力	・相違点など、自分の考えと比べながら聞く力 ・友達の考えを理解しようと聞き、よさを認めたり取り入れたりする力	・めあてに向かって粘り強く努力する力。 ・「できるようになりたい・知りたい」ことに関心をもち挑戦する力

＊友達の考えと自分の考えを比べながら聞く力
＊自分事としてとらえて聞く力
＊情報を整理して、相手に伝えたいことを選択して記述する力

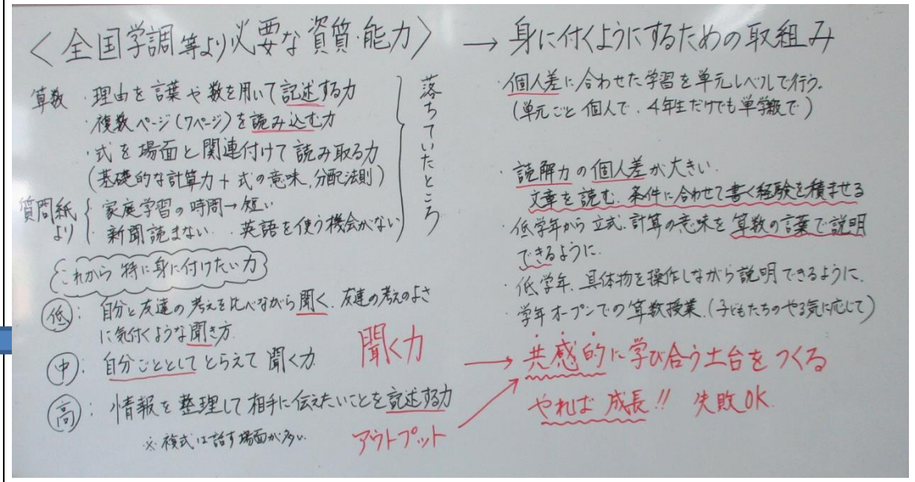
共感的に学び合う土台作り(学級経営)

(2)　「育成を目指す資質・能力」を身に付けるために必要な指導・取組み等

「確かな学力」の育成（令和4年度学校教育指導の重点p16~）を意識しながら指導・取組みを考えましょう。

具体的取組み

５・６年生	・単元計画の中に目指すゴールと育てたい資質・能力を児童に示す。 ・学年に応じた両間接指導を意識した授業展開を行う。 ・相手や学習対象、自己対話に必要な力の共有化と系統的な整備を行う。 ・個別最適な学びにつながる学習材の精選やタブレットの有効活用をする。 ・深い学びにつながる振り返りを価値づけする。 ・自分の考えを、適切な表現で、相手を意識して伝える場の設定をする。 ・共感的・批判的なものの見方をしながら、話し合わせる。 ・既習事項との違いを確認し、根拠として使える表・グラフ・式などの情報を整理してまとめる。
３・４年生	・一人一人が心を開くことのできる学級の雰囲気づくりをする。 ・学習意欲を持続させることのできる単元計画、授業の展開を工夫する。 ・個人差に応じた支援をし、分かる授業、伸びる授業を心がける。 ・教師が話すのではなく、児童同士伝えたいと思う場づくりをする。 ・ふり返りを位置づけ、ふり返りの価値づけを行う。また、ふり返りを次時の学習に生かす。
１・２年生	・個人差に応じたねらいを意識して授業を仕組む。 ・国語・算数のリーダーを全員に経験させ自分たちで学習を進めるように支援する。 ・努力と小さな進歩を認め、自己肯定感と意欲を持てる授業展開する。 ・読み・書き・計算などの反復学習を継続して取り組ませ、習熟と家庭学習の習慣化を図る。



取組みの振り返り・児童生徒の姿の見取り（８月）

・低学年は、学習リーダーが授業を進めることを意識して学習を進めた。学年に応じた進め方ができるようになってきた。型にはまらず柔軟に進められるように支援していく。友達の考えを聞くより、正答を求めたら終わりという実態があるので、比べながら意見を聞くように学習を展開していく。
・中学年は、国語の単元計画作りをしたところ、子供たちが見通しをもち学習を進められたので続けていく。個人差に応じた支援をしていくために、学習の方法や問題、内容を自己選択させてみた。個々に自分事としてとらえて学びを進められるようになってきたので続けていく。
・高学年は、自分たちの能力を考えながら対話を通して単元計画を作った。その結果、主体的に学ぶ力や深い学びにつながる振り返りができるようになってきている。情報の選択や条件に合わせて記述して伝える力を育てていく。

取組みの振り返り・児童生徒の姿の見取り（１２月）

・低・中学年では、非認知能力を高めるために、一人一人が心を開くことのできる学級の雰囲気づくりをするよう努力してきた。友達の発言を否定する言い方は減ってきており、少しずつ共感的に話が聞けるようになって来た。
・低・中学年では、学習課題から各自学びのめあてを立てて学びを進めたり、振り返りを次時の学習につなげたりするカードを活用し、自己調整力を身につけるように支援した。また、算数科では、６年生が４年生と一緒に復習する場を設けた。お互いに交流することで学びが深まった。
・高学年は、共感的に聞くことに加えて、自分の考えと比べて批判的に聞くこともできるように支援してきた。また、自分たちで単元計画を作ることで、学びのゴールを見通して進めたり、単元に合わせて自由進度学習を取り入れたりできるようになってきた。

令和５年度　河北町立谷地西部小学校　資質・能力系統表（新）

学校全体でめざす【資質・能力】	自ら行動する力（主体的な学び）	人を大切にする力（対話的な学び）	考え抜く力（深い学び）
低学年	**分かったことや分からないことを明確にし、課題解決に向かおうとする力**	**相違点など、自分の考えと比べながら聞く力 友達の考えを理解しようと聞き、よさを認めたり取り入れたりする力**	**めあてに向かって粘り強く努力する力。 「できるようになりたい・知りたい」ことに関心をもち挑戦する力**
	・国語・算数のリーダーを全員に経験させ自分たちで学習を進めることができる。 ・分かったことや分からないことを明らかにしながら、課題解決に向かおうとすることができる。 ・既習事項を活用したり、調べたり、だれかに聞いたりして課題を解決することができる。 ・新たな知識と生活経験をつなぐことができる。	・同じ・違う・似ているなど、自分の考えと比べながら聞くことができる。 ・友達の考えを理解しようとして聞き、よさを認めたり取り入れたりすることができる。 ・自分の考えが友達に伝わるように、考えの根拠（理由・説明など）を書いたり話したりすることができる。	・めあて（自分がめざす姿）をもち、それに向かって粘り強く努力することができる。 ・何が分かったのか、何ができるようになったのかを自分の言葉で表現することができる。 ・これまでできたこと・分かったことを受けて、さらにできるようになりたいことや知りたいことに関心をもつことができる。 ・困ったときや、失敗したときに、その後どうするかを考えて行動することができる。
中学年	**課題解決に向かって、自分事として取り組む力 友達と協力し、自分たちで学びを進める力**	**自分の思いを書いたり話したりする力 友達の話を共感的に聞く力**	**課題解決に向けて、粘り強く考える力 自分でめあてを設定する力**
	・教師とともに単元計画を作り、見通しをもって学習を進めることができる。 ・既習事項との違いに気づくことができる。 ・見通しをもち、課題に合わせた解決方法を選択することができる。（タブレットの活用も含む） ・自分たちで話し合い、課題解決に取り組むことができる。	・友達のまちがいや失敗を許し、励ますことができる。 ・友達の話を共感的に聞き、自分の考えとの共通点や相違点に気づくことができる。 ・情報を収集したり選択したりして、自分の思いや考えを持つことができる。 ・自分の言いたいことが伝わるように、筋道を立てて話すことができる。 ・構成を考えて、書きたいことが読み手に伝わるように工夫して書くことができる。	・自分の力や現状をとらえることができる。 ・現状を踏まえ、自分事として課題をもつことができる。 ・課題克服に向けて、最後まで粘り強くやり切ることができる。 ・友達と協働的に課題を解決することができる。 ・自分の学びについてふり返り、次の学習に生かすことができる。
高学年	**自己と向き合い、主体的に課題に取り組む力 課題解決に向けた見通しをもって、自分たちで学びを作る力**	**多様性（違い）を認め、尊重しながら聞き話し合う力 目的や相手を意識した表現力**	**他教科で得た知識同士をつなげて活用する力 よりよいものを求めて粘り強く解決し、挑戦する力**
	・３つの資質・能力を意識しながら、自分たちで学習の課題とゴールを見通した単元計画を作り、学びを広げたり深めたりすることができる。 ・自分の考えを適切な表現を用いたり、理由や根拠を既習事項との違いを明確にして使える表やグラフ・式・文章などを示したりしながら、相手に応じて伝えることができる。	・友達の意見や考えを比較、関連づけして聞くことができる ・共感的・批判的なものの見方を持ちながら、話し合うことができる。 ・問題をより価値の高い解決をするために、自己内対話や自分たちで話し合って進めることができる。	・自分の力を知り、よりよい姿を求めて粘り強く努力し、解決したり、生活に生かしたりすることができる。 ・自分の学びの振り返りを、次の学びにつなげることができる。 ・自分の興味関心をもとに、課題を設定し、解決に向けて挑戦することができる。

あ　と　が　き

今年度は、「誰一人取り残さない、子供が育つ授業づくり」という研究主題のもと、完全複式の本校だからこそできる、子供が主語の授業づくりに取り組みました。付けたい力を視点とした子供の見取りをもとに、課題設定や単元構成、教師の支援のあり方等を問い直し研究を進めて参りました。

その結果、子供たちには自分の学びに責任感を持ち、互いに協力し合いながら学ぶ姿勢が育ってきました。また、事後研究会では、それぞれがタブレットで撮影した子供の学びの事実をもとに、互いの気付きを交流し、子供の思考や学びの状況に寄り添った支援、教科で大切にしたい見方・考え方について考えを深めることができました。

また、研究を進める中で、誰一人取り残さない授業の実現には、子供が安心して学ぶことのできる環境づくりが不可欠であることも再認識しました。子供が自分の気持ちや考えを素直に表現し、他者の気持ちや考えを尊重することができる環境は、子供の学びを豊かにします。特に今年度は、そのような環境づくりの方策について何度も話し合いました。教育学者の平野朝久さんは、『はじめに子どもありき』という著書の中で、「子どもの事実を価値判断せず、共感してありのままわかろうとすること」、「子どもの声に耳を傾け、子どもと一緒に授業を創っていこうとする姿勢の重要性」を述べています。本校では今後も、教師の価値観や枠に子供を当てはめるのではなく、子供の多様性に応じた豊かな学びの場を創っていくことを大切にし、学校研究を進めて参ります。

最後になりますが、本校の研究にご指導いただきました、村山教育事務所　織江真由美指導主事、笹原大輔指導主事、さらには、研究会に参加いただき、たくさんのご示唆をいただきました皆様に心より感謝申し上げます。今後とも、私たちの研究にご指導ご助言いただきますようお願い申し上げます。　　（教頭　増川）

研　究　同　人

校　　長	白田　敏幸	主任主査	須藤　純子
教　　頭	増川　秀一	ｽｸｰﾙｻﾎﾟｰﾄｽﾀｯﾌ	縄　　真実
１・２年担任（教務主任）	大前　圭史	学習生活指導補助員	横山　晶子
３・４年担任	村山　智香	業 務 員	井上　彰一
５・６年担任（研究主任）	牧野　由香	給食配膳員	高橋美千代
養護教諭	佐藤　幸栄		

令和５年度「研究集録」
「誰一人取り残さない　子供が育つ授業づくり」

発行日　　令和６年　３月
発行者　　河北町立谷地西部小学校
　　校　長　　白　田　敏　幸
〒　999-3511　山形県西村山郡河北町谷地大字布田５５番地
TEL　0237-71-1108　FAX　0237-71-1109
Ｅ-mail　seibu@bird.ocn.ne.jp